

『ほのかに苦くけれど甘く』

著：坂井朱生

ill：北沢きょう

久瀬は、恭一が欲しいと思っていたものを、意識していなかったものまでを教えて、見せて、与えてくれた。しかも、面白味のない恭一に、彼から近づいてきて、かまってくる。

(ああ、そうか)

こんなふうにならしたら、好きになるに決まっている。久瀬が言うところの情緒未発達な恭一であっても、ひよっとしたら未発達だったからこそ好きになってあたりまえだ。

沈んだ顔につらくなってどうにか元気になってほしいと思ったり、触れた唇にどきどきしたり。不可解な感情の行方が、ようやくに理解できた。

「なんかわかった」

「へ？ なにが」

唐突な恭一の言葉に、久瀬がハンドルを切りかえしながら訊ねた。

「俺さ、自慢じゃないけど初対面の人って苦手なんだ。なに話していいかわからないし、失礼なこと言って怒らせるし。でも、久瀬さんとは最初から平気だっただろ？」

「そうだったなあ」

「あれって、最初はどうでもいい人だからかって思ってたんだけど」

ちらりと目に映った久瀬が拗ねて口を尖らせてみせるのに、「そうじゃなくて」と慌てて否定する。

「久瀬さんて上村にちょっと似てるんだ。喉乾いたと思ったらジュース渡してくれたり、俺が酷いこと言っても怒って見捨てないでくれるし。おおらかっていうか、そういう雰囲気みたいのが」

「じゃあ、上村とやらが振られたら、あいつにもちゅーしてやんの」

一瞬想像しかけてしまって、とたんに恭一の顔がどんよりと曇った。

「やめてよ気持ち悪い」

洒落(しゃれ)や罰ゲームならともかく、上村と至近距離で見つめあうなんて考えただけでも鳥肌がたちそうさ。

「そう？ ならいいけどな」

話しているうちに、だんだんと自分の気持ちが腑(ふ)に落ちる。キスしてやるのかと言われたのが決定的だったみたいだ。

そう。たとえば上村がゲイで、彼がもし誰かに振られておちこんでいたとしたら。それでも、言葉や態度ではいくらでも慰めたいと思うしできることはするけど、でも、キスマではとてもできそうにない。

(俺。久瀬さんが——、好きなんだ)

恋、という意味で。たぶん、これが初恋だ。

けれど、久瀬は「好みがある」と言っていた。はじめてまともに人を好きになったのに、いきなり失恋決定だ。

最初からぜんぶ上手くいくなんて虫が良すぎるけれど、さすがに胸が痛い。

こんなふうに関連してくるだけ、気にかけてくれるだけでありがたい。それだけで充分なはずだ。本来ならもう恭一と会う必要なんてなに一つないのに、それでも「いつでも連絡しろ」なんて言って、今日もドライブにと誘ってくれた。

それだけで、充分すぎる。

納得したがらない自分に、恭一は心の中で懸命にそう言いかけようとした。けれど。「俺、先輩のこと好きかもしれない」

ぽろりと言葉にしてしまったのは、いつもの悪い癖だ。最悪の言葉を最悪の状況で告げてしまって、恭一は今度こそ心底後悔した。

「……ああ?！」

さすがに久瀬も動揺したのか、ほんの一瞬だけハンドルがぶれる。うわっと小さく声をあげて、久瀬の肩が強張った。

「あ…のなあ！ 運転してるときに唐突に言うなよ。だいたい、『かもしれない』じゃ本気にできないんだよ。莫迦」

驚かすな、と、久瀬が大きく息を吐いた。

「じゃあ『好き』」

言うつもりはなかったにしろ、本気にできないなんて言われたらさすがに腹がたつ。売り言葉に買い言葉というように恭一が言いなおすと、とたんに久瀬の表情が陰しくなった。

「勢いだけで適当なこと言うんじゃないの」

低い、抑えるような声音は、恭一がはじめて聞くものだ。静かな迫力に怯(ひる)んだが、それでもここで撤回したら絶対に信じてはもらえないだろう。

恭一にも意地がある。好きだと気づいて、失恋して。それだけでも初心者マークの恭一には痛手なのに、そのうえ気持ちを信じてさえもらえないなんてあんまりだ。

「適当じゃない。ちゃんと考えた」

「いつ」

「今……だけど。でも」

「『でも』じゃない。好きだとか嫌いだとか、男相手に気軽に言うもんじゃないだろ」

「どうしてさ」

「わからなきゃいい」

「誤魔化さないでよ」

「誤魔化してんじゃなくて、説明するようなことじゃないんだよ」

「気軽なんかじゃないよ」

勢いと言われても否定はできない。けれど久瀬と知りあってからずっと、彼と一緒にいたいと思っていたのは本当のことだ。その気持ちを他の人がなんと表すのかを、今まで知らずにいただけだ。

「じゃあ。……じゃあ俺が、久瀬さんみたくゲイならいいの？ 誰か他の男とつきあったあとなら本気だって考えてくれるの？」

恋を知らないから。男相手に気軽に言うものじゃないから。そんな理由で軽んじられてしまうというなら、久瀬が納得できるような手順を踏むまでだ。

「恭一」

「俺、真面目だからね。ふざけてこんなこと、言ってるんじゃないからな」

「男とつきあうってのは、考えてるほど楽なもんじゃないんだよ。まったく」

「つきあってくれなんて言ってない。久瀬さんがフラれたっておちこんでたのも覚えてるし、好みがあるって言ってたのだから、忘れてなんかない」

ただ、好きだという気持ちを嘘にしてほしくないだけだった。

「……信じてくれたら、それでいいんだ」

必死に言い合っているうちに、どんどんせつなくなってくる。どうあっても受けいれてくれないだろう相手に、なにを一生懸命に話しているんだろう。どうせ失恋するのなら、彼が思うように冗談や弾みなのだとしてしまえばよかったのに。

莫迦みたいだ。

本文 p99～104 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>